

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：「基盤研究 (C)」

研究期間：2006～2008

課題番号：18530651

研究課題名 (和文) 植民地下朝鮮からの女子内地留学生の研究

研究課題名 (英文) Research on Korean Female Students Studying the Main islands of Japan During the Japanese Colonization of Korea

研究代表者

太田 孝子 (OHTA TAKAKO)

岐阜大学・留学生センター・教授

研究者番号：00293580

研究成果の概要：

植民地下朝鮮にあった高等女学校を卒業後、内地に留学した経験を持つ7名の朝鮮人女性にインタビュー調査を実施し、留学の経緯及び内地での留学生活に関する具体的証言を得た他、11校分の高等女学校史の翻訳、主要人物の伝記等の翻訳により、高等女学校毎の内地留学の実態を把握した。また、「鴻嬉寮」(主に李王妃が創設した淑明高等女学校と進明高等女学校からの内地留学生のために、李王家が東京市渋谷区若木町に開設した寮)に関する文献や入寮者2名に対するインタビュー調査により、鴻嬉寮の概要を究明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	480,000	3,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育社会学・多文化教育

キーワード：内地留学、植民地教育、高等女学校

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者及び研究分担者(最終年は連携研究者に変更)が所属する「高等女学校研究会」では、女子中等教育の実態把握を目的に、20余年に渡って日本国内、南洋諸島パラオ、台湾等に設立された高等女学校の調査・研究を実施し、その成果を刊行してきた。

ここ10年程は朝鮮に開校された高等女学校(以下、高女の略記も使用)の実態把握に焦点を当て、28校の高女卒業生に対するアンケート調査(卒業生には総計1,397通送付、

回答331通、元教師には計5通送付、回答2通)、高女卒業生28名及び元教師5名に対するインタビュー調査、学校史の翻訳、文献・資料の収集等により、朝鮮における高等女学校教育の実態把握に努めてきた。

特に、①各高等女学校の特色とその教育内容を探ること、②調査時点で回想した場合、卒業生にとって高女時代はどのような印象を残し、どのように記憶されているのか、また高女教育の意義をどのように感じているのかを明らかにすること、③教師に対する卒

業生の印象・回想を基に、各校の教育を支えた教師像を描写すること、④卒業後の進路を把握すること、⑤同窓会の活動並びに卒業生の交流の実態を把握すること、の5点を中心にアンケート調査、インタビュー調査、学校史等の分析・考察を行なった結果、朝鮮における女子中等教育に関する主要部分の調査・研究はほぼ終わることができた。

(2) 高等女学校生徒の卒業後の進路、特に「日本(内地)留学」が未調査部分として残っていた。これまでの調査・研究の中で、斎藤実総督による「一視同仁」の文化統治以降、高女卒業生の内地への留学が増加していくことは確認してきたが、この実態を吟味する必要があった。内鮮融和政策と内地留学の関係、内地留学と抗日運動の関係を念頭に、女子内地留学生の実態を調査すること、「新女性」としての卒業後の歩みや社会参加の在り方を検討することが主たる課題となった。

## 2. 研究の目的

(1) 女学校卒業後に内地に留学した朝鮮人女子留学生、卒業高女、受入れ学校に焦点を当て、調査・研究を実施する。対象は、a)東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大学)、b)帝国女子専門学校(現・相模女子大学)、c)女子美術学校(現・女子美術大学)とし、学校史、学校新聞、同窓会誌等により、朝鮮人女子留学生数、選抜方法・留学規定、留学の実態(授業、寮、友人関係、内地での生活など)を学校毎に比較・検討する。

(2) 上記各学校への朝鮮人女子留学生並びに関係者にインタビュー調査を実施し、留学時代がどのようなものとして記憶されているか、その後の歩みにどのような影響を与えたか、など留学の内実を把握するとともに留学の意義を究明する。

(3) 内鮮協会及び李王家御慶事記念会の設立者で、奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大学)等への留学を斡旋し、朝鮮人女子留学生の重要な支援者でもあった柳原吉兵衛に関する資料・文献を収集し、柳原の内地留学に果たした役割を検討する。同時に、1920年4月の李垠皇太子と梨本宮方子女王の結婚を記念して設立した「李王家後慶事記念会」とはどのような組織・内容であったのか、内地留学にはどのような役割を果たしたのか、を解明する。

(4) 李王家が設立した朝鮮人女子留学生のための寄宿舎「鴻嬉寮」に居住した留学生にインタビュー調査を行ない、資料・文献を取

集することにより、鴻嬉寮の概要を把握する。

(5) 内地留学生の卒業後の進路を、抗日運動への参加も含め調査する。

## 3. 研究の方法

(1) 資料・文献研究および統計分析による検証

①内地へ女子留学生を送り出した高等女学校の学校史の中、「留学・留学生」に関する記述を整理し、留学生数を把握する。学校新聞、同窓会誌等により、各女学生の動向・交流状況を把握する。これまでに実施したアンケート調査、インタビュー調査をまとめた資料集を再読し、「内地留学」に関する部分を抜粋・記録し直す。

同時に内地留学生を多数受入れてきた、a)東京女子高等師範学校、b)帝国女子専門学校、c)女子美術学校に焦点を当て、女子内地留学生の実態調査を行なう。学校史、大学新聞、同窓会新聞、同窓会記録等を使用し、受入れ人数、授業・寮等の状況、卒業後の進路、卒業後の交流状況等各学校側の留学生受入れに関する項目を中心とする。

②『朝鮮総覧』、『最近朝鮮事情要覧』、『統監府統計年報』、『朝鮮総督府統計年報』、『朝鮮諸学校一覧』などを使用し、公立・私立高等女学校の統計的調査を実施する。

③植民地下朝鮮の女子教育、関連事項・人物に関する資料・文献を収集し、文献研究を行なう。

(2) 内地に留学した当時者並びに関係者へのインタビュー調査

①朝鮮人女子内地留学生及び関係者に対し、留学・留学生活及びその後の進路に焦点を当てたインタビュー調査を実施する。

## 4. 研究成果

研究の主な成果は、以下のとおりである。

(1) 淑明高女(私立)、進明高女(私立)、京畿高女(公立)、梨花高女(私立、キリスト教系)、培花高女(私立、キリスト教系)、好壽敦高女(私立、キリスト教系)、一新女学校(私立)等、11校分の学校史の中、内地留学を中心とする卒業生の進路に関する記述を翻訳・整理することにより、各女学校における留学生数、留学先、卒業後の進路・職業等、朝鮮からの女子内地留学生の動向を概ね把握した。

各学校史には内地留学に関する年次毎の詳細な記述・記録はほぼ皆無であり、主立った卒業生の動向のみが記述されている状況

であったため、集計結果を提示することは不可能であるが、おおよそ以下の傾向が見られた。淑明高女、進明高女、京畿高女からの内地留学生は、東京女子高等師範学校、日本女子大学校、奈良女子高等師範学校、女子美術学校、帝国女子専門学校、東京女子医学専門学校（現・東京女子医科大学）、帝国女子医学薬学専門学校（現・東邦大学）、日本女子体育専門学校（現・日本女子体育大学）等多岐にわたる分野・地域に留学した者が多く、キリスト教系高女は、同志社女子専門学校、活水女子専門学校、金城女子専門学校、神戸女子神学校などキリスト教系女学校への留学生が多数を占めた。

各留学生の卒業後の進路としては、帰国後母校の教員として勤務した者がほとんどであり、戦後は大学教員に移行した者も多い。初期の留学生の中には、帰国後、女学校を設立した者も数名輩出した他、多彩な分野で活躍をし、留学体験が生かされていることが判明した。以下は、特に顕著な受入れ学校の事例である。

①東京女子高等師範学校の朝鮮人卒業生は53名を数える（卒業後の去就が詳細に把握されている者は現時点で32名、第二次世界大戦による中途帰国者は4名）。卒業生は、いずれも教師、教授、行政官、研究者として優れた業績を残している。1945年以降、再び大学院に入学して研鑽を積み、大学教授として活躍している者が大半を占める。京畿高女および淑明高女を卒業後、同校に留学し大学教授として活躍する2名にインタビュー調査を実施し、留学中の勉学風景、恩師の思い出をはじめ、留学体験がその後の歩みにいかされ、現在も日本人旧友との交流が続けられている様子を聴取した。

②戦前、朝鮮から80人以上の留学生が在籍した帝国女子専門学に関する調査を実施し、留学生の全体像を把握した。当時、内地留学生は家事科にしか入学することができなかったため、卒業後、家政学や料理の分野で活躍している者が多く、国民の栄養問題の解決や給食の普及に尽力した。進明高等女学校を卒業後、同校に留学した2名にインタビュー調査を実施し、日本語の問題もなくスムーズに学校生活にとけ込み、寮長として活躍したことなど留学生生活全般にわたる具体的証言を聴取した。

③女子美術学校への内地留学生は国内最多の107名を数える。韓国の大学に美術科が設立されるのは独立後であったため、美術を志す女性は同校へ留学し、戦後、韓国の美術界、教育界で活躍した。

本研究では、進明高女を卒業後、同校初の内地留学生となった羅蕙錫（朝鮮女性初の洋画家）を取り上げ、調査を進めた。関係者（姪の羅英均氏で、『日帝時代、わが家は』の著

者）にインタビュー調査を実施した他、李サンギョンによる伝記、『永遠の新女性羅蕙錫』を翻訳し、羅蕙錫の全体像の把握に努めた。抗日運動にも関与し、入獄するなど、波乱の生涯を生きた人物として、興味深い研究の一步となった。

また、李淑鍾は淑明高女・女子美術専門学校卒業後、誠信女学校及び誠信女子実業初級大学校（現・誠信女子大学校）を創設した人物である。伝記「李淑鍾先生の歩んできた道」（『誠信25年史』所収）他の文献を翻訳し、李淑鍾の留学体験と帰国後の社会参加の在り方を検討した。

(2)「鴻嬉寮」に関して残存する資料は僅かであるが、それらの資料を分析した他、入寮者3名（各々、京畿高女から東京女子高等師範学校に留学、進明高女から帝国女子専門学校に留学、淑明高女から東京女子高等師範学校に留学）にインタビュー調査を実施した。寮の間取りや寮生活の詳細を聞き取り、鴻嬉寮の概要を把握した。

鴻嬉寮は、1940年、渋谷区若木町にあった李王職長官邸を開放して、朝鮮人女子留学生のための学生寮としたものであり、日本女子大学校、東京女子医学専門学校、帝国女子医学薬学専門学校、帝国女子専門学校などに通う、13～15名の留学生が入寮した。食糧難の時代に不自由なく食事が賄われ、関屋依子（朝鮮総督府中枢院書記官長兼内務部学務局長関屋貞三郎夫人）、宇佐美ケイ（李王家職員、後に女子学習院幼稚園主任を歴任）などが寮母として留学生を指導・支援した。また、鴻嬉寮は礼儀作法、短歌、書道、茶道など、日本文化を身を教授する場としても機能した。年に一度は赤坂の李王家に招待されるなど、「内鮮融和」政策の一環として創設され、留学生の「日本」への同化に寄与した寮ではあるが、その政策の具に終わらず、寮での体験は寮生一人一人のその後の歩みに大きな影響を及ぼした。戦争により短期間の運営に終わったが、他に類を見ない学生寮であったことが判明した。

(3)「いずれの民族にしても女性は母となって次期の国民を育てるものである・・・公立女学校に学ぶ者たちから向学心を助長し、日鮮両民族の心からの融和を理解させることである」という信念で、80名以上に及ぶ内地留学生を支援した柳原吉兵衛（1858年大阪に誕生、堺市に大和川染工所を創業し大きな利益を得る、キリスト者として数々の社会事業に関与した）は、女子留学生が日本に到着した時から卒業して帰朝するまでの援助・交流のみならず、書簡のやり取りの他、毎年のように訪朝し、卒業生との親睦会、勤務校訪問等の交流を続けた。また、「李王家御慶事

記念会規則」の第6条に「内地ノ学校ニ勉強スル朝鮮学生ノ援助ヲナスコト、其他必要ニ応ジテ事業ヲ起スコトアルベシ」と言う一文を設け、女子留学生を援助し続けた。残された書簡は1,190通に及ぶ。前述の羅蕙錫の書簡数通も残されている。

(4) 研究代表者は京畿女子高等女学校卒業生及び同校元教師4名へのインタビュー結果を、『海峡を越えて—京畿高等女学校の思い出』としてまとめ、刊行した。

(5) 研究代表者は、植民地における高等女学校教育の実態を小・中学校の教育と比較するため、柳宗鎬『僕の解放前後 1940—1949』を日本語に翻訳し、出版した。

(6) 連携研究者は、明治期から活発になった外国人女性の来日と日本人との交流、日本人女性の留学の歴史を、『つながりあう知』として出版し、朝鮮人女子留学生の実態と比較・検討する一助とした。

(7) 「歴史を複眼で見る—朝鮮の高等女学校の思い出」というテーマで、元京畿高等女学校教師吉田重氏（当時94歳）とともに講演し（2008年3月15日、於：岐阜市めいてつギャラリー、62名参加）、岐阜県女性の会「スコープ21」主催の講演会において、「植民地下朝鮮の高等女学校と女学生」という演題で講演（2008年7月18日、於：岐阜グランドホテル、80名参加）するなど、研究成果を公開した。

成果の国内外における位置づけ及びインパクトとしては以下が上げられる。

a) 体系的な高等女学校研究が皆無である上、植民地における高等女学校の本格的研究成果が発表されていない状況の中、「高等女学校研究会」が大きな役割を担ってきた。本研究もその一端を担うものであり、女子中等教育のみならず、内地留学という卒業後の進路にも注目して総合的な研究を行っていること、b) 資料・文献研究、統計分析による検証と並行して、現地に赴き、卒業後内地に留学した当時者並びに関係者にインタビュー調査を実施して実態把握に努めていること、c) 「内鮮融和」政策と内地留学の関係、内地留学と抗日運動の関係にも着目しながら、調査・研究を行っていること、の3点が特色である。特に、鴻嬉寮に関する概要を解明できたこと、帝国女子専門学校および東京女子高等師範学校への内地留学生の全体像を掌握できた点が評価されよう。

戦前の内地留学生が高齢となり、インタビュー調査やアンケート調査が不可能となる中、今後早急にしなければならないことは、

a) これまでに入手した資料・文献等を再検討し、補足調査を行なうべき点は調査し、論文や報告書にまとめ発表すること、b) 翻訳済みの学校史、伝記等を刊行すること、c) これまでの調査・研究を『植民地下朝鮮の高等女学校の総合的研究』としてまとめ刊行することである。

本研究を通し、さらなる調査・研究の必要を覚えていることは、関屋貞三郎・依子夫妻、宇佐美ケイ、東京YWCAなど柳原吉兵衛に匹敵する内地留学生の支援者／団体の存在であり、これに焦点を絞って日本側の受入れ状況を把握することが課題である。女子内地留学生にとっての“パトロン”であった人々、さらには視野を広げて、明治以降、米国に留学した日本人女子留学生を支援した米国人ウェイスター・モリス夫人など、“異文化をつないだ人々”に着目し、比較の目を持ちながら、その役割と意義を究明していくことが、今後の展望の一つである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

1. 太田孝子「植民地下朝鮮における京畿高等女学校(上)」、岐阜大学留学生センター『留学生センター紀要 2007』、査読有、p3-19、2008年
2. 福田須美子「日本への留学—帝国女子専門学校に学んだ留学生—」、相模英米文学会『相模英米文学』第26号、査読無、p35-43、2008年
3. 太田孝子「植民地下朝鮮の女学生—進明高等女学校を中心に」、岐阜大学留学生センター『留学生センター紀要 2006』、査読有、p19-36、2007年

〔図書〕（計3件）

1. 福田須美子『つながりあう知』、春風社、2009年3月、全247ページ
2. 柳宗鎬『僕の解放前後 1940-1949』、白燦訳、太田孝子日本語校閲、春風社、2008年10月、全375ページ
3. 太田孝子『海峡を越えて—京畿高等女学校の思い出』、春風社、2008年9月、全206ページ

〔その他〕

1. 「朝鮮の高等女学校と女学生」、講演：太田孝子、岐阜県女性の会「スコープ21」主催講演会、2008年7月18日、於：岐阜市グランドホテル
2. 「女学校卒業生との交流を通して」、講演：

太田孝子、岐阜大学留学生センター公開セミナー『歴史を複眼で見る』、2008年3月15日、  
於：岐阜市てつめいギャラリー  
(上記講演に関しては、岐阜大学留学生センター『留学生センター紀要 2008』、p47～59  
に所収、2009年3月)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

太田 孝子 (OHTA TAKAKO)  
岐阜大学・留学生センター・教授  
研究者番号：00293580

### (2) 研究分担者 (平成 18～19 年度)

福田 須美子 (FUKUDA SUMIKO)  
相模女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号：80218924

### (3) 連携研究者 (平成 20 年度)

福田 須美子 (FUKUDA SUMIKO)  
相模女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号：80218924